



ドイツと戦後日本のコーヒー

ドイツのコーヒーの歴史は、コーヒーの現代史において柱軸に据えられるものだと私は思います。ドイツ（プロイセン王国）の形成は、植民地支配を推進した欧州列強国の中でもっとも新しく、オランダやイギリスのように早くから貿易を主導したわけでもなければ、世界史における交通の要所を押さえたわけでもありません。そして、コーヒーに関しては、木の植え替えの歴史を主導したわけでもありませんでした。

当国でグローバルイノベーションが専ら反動的な側面をあらわすことは、フアシズムなどによって理解されていると思いますが、黎明期のドイツは、何よりおそろおそろる国民国家が形成された印象があります。そしてコーヒー栽培と生産／飲用と普及の歴史においても、物事が固まるには長い年月が必要でした。

ドイツ国はその歩みの重さが、結果としてコーヒーの本質的な部分の

形成と、うまくかみ合っていたようです。18世紀まで主役でなかった当国が、19世紀以降のコーヒーの世界で、急速に本質的な姿を現したのです。ドイツ語にはBohnenkaffee（コーヒー豆のコーヒー）という奇妙な言葉がありますが、これは流通する代用コーヒー（木の根や草花等を焦がしたもの）が多すぎたため、本物のコーヒー飲料を区別するために作られた言葉です。

ドイツ国内では、フリードリヒ王政下、内需（ビールの消費）推奨のため珈琲飲用が禁止されており、市



▲ドイツ製プロバット焙煎機

井の人々は隠れて「偽物の珈琲」を飲んでいました。良質なコーヒーが可能性豊かに広がるための土壌が、密かに育まれていたのです。そしてもう一つ育まれたのが、ハズレを引いた植民地での農産物でした。

オランダやイギリスが地中海沿岸や北アフリカから東に航路を取り、交通の要所を押さえながら世界貿易を主導していった中、末っ子ドイツは、残り物の土地（具体的には東アフリカや中央アフリカ）を押さえるしかありませんでした。イギリスがインドや中国で紅茶商売をはじめたことと隣接する出来事として、オランダは東に押さえたアジアの植民地支配を強め、当地でのコーヒー栽培をすすめました。しかし東南アジアは酸性土質のため、アルカリ性土質に相性を見出すコーヒーの木育成に、必ずしも適した土地ではなかったのです。

大量に生産された育成環境不足のコーヒー豆は、ヨーロッパで洗みを済ませた後、黒に焼いて、加圧状態の沸騰水で抽出する機械を生み出すしかありませんでした（エスプレッソ）。ドイツが後出して手に入れた周縁の植民地は、肥沃な火山灰土質の土地が多く、その結果として高品質のコーヒーが次々と生産された

のです。優れたソフト（コーヒー豆）は、優れたハード（機械、器具）を強力に要請します。

ドイツでペーパードリッップが生まれたのも、プロバットを礎とする現代式のコーヒー焙煎機が生まれたのも、このためです。そして、これらはすべて現在にまで繋がる、戦後日本と世界のコーヒーのあるひとつの「標準」となったのです。



▲ドイツ生まれのペーパードリッップ



小森 敦也
(こもりあつや)

1982年4月12日生まれ
岐阜県立関高校卒業。東京の大学を経て複数の会社勤務の後、関市のカフェ・アダチのトアレセンを経て、CQIのQグレーダー資格を岐阜県で初めて取得。2016年より代表取締役。現在店舗運営に留まらず、海外の農園を視察し、コーヒー豆の収穫や買付に携わる。

カフェ・アダチ

関市小瀬1833 TEL0575-23-0539